

眼の男・大杉栄

大沢正道

一九二三年（大正一二）年九月一六日、大杉栄が、伊藤野枝、橘宗一とともに殺された知らせを聞いて、報復を誓ったものは、全国で二千人か三千人はいただろうい、という風説がある。中浜哲は、この誓いを行動に移した一団のひとびとの首領株であるが、この中浜が、第四次『労働運動』（第二号・一九二四年三月）に、富岡誠の名で寄せた「三〇行余の追悼詩『杉よ 眼の男よ』」は、人間大杉をみごとに浮彫りにした傑作とされている。

「杉よ！」

眼の男よ！」と

俺は今、骸骨の前につけて呼びかける。

俺は黙っている。
彼は俺を見て、ニタリ、ニタリと苦笑してゐる。
太い白眼の底一ぱいに、黒い熱涙を漂はして時々、
海光のキラメキを放って俺の顔を射る。

このような書き出しではじまるこの詩は、大杉を「眼の男」という表現で、的確に形象化している。大杉の眼は、母方ゆずりだっただけでなく、「自叙伝」にも「そんな目はうちの一族のほかにどこにもないよ」という従兄の言葉が語られている。また、内田魯庵は雑誌「改造」（一九二三年一月）の追悼のなかで、「私は能く人に咄すが、バクレーニンでもステッブニヤックでも今のトロツキーでも共通な物騒な眼を持つてをる。此眼を私は自分で「ナイヒリスチック・

あるいはその五行ほど先に――

彼に、

イロが出来たと聞く毎に

「またか！」

アノ眼に参つたな」

女の魂を攫む眼、

より以上に男を迷はした眼の持主

「杉よ！」

眼の男よ！」

アイス」と称してゐるが、大杉も此眼を持つてゐた」（「第三者から見た大杉」と述べている。土岐善磨もおなじ追悼号で、「大杉はい、眼をもつてゐた。かれを『巨頭』らしくみせた顔つきは、その眼が与つてよほど力がある。大きく円く、ぞつと見つめられたとき、恋の女性は無練の短刀を懷中に忍ばせなくてはゐられなかつたらう」（「印象二三」と、神近市子の刃傷事件にからませて書いており、その他、大杉の眼をめぐる追想は、この追悼号にかぎつても、多くのひとびとによってなされている。

中浜の追悼詩の迫力は、大杉のもつとも特徴的な部分、ひとびとの心にもつともよく刻みこまれていたもの、いわば大杉のシンボルであった「眼」をとらえ、その「眼」をもつて語らせたところにあるようだ。

これは又、食ひつき度い程
あはれをしのばせ

微笑まねど

惹き付けて離さぬ

彼の眼の底の力。

慈愛の眼、情熱の眼、

沈黙の眼、果敢の眼、

全てが闘争の利器に盛られた

信念の眼。

中浜はつづいて、「親友」高尾平兵衛、「畏友」有島武郎、そして「知己、先輩の『杉』」の死と対決したかれの決意を語って、このながい詩をむすんでいるのだが、大杉が、「女の魂を攫む」以上に、「男を迷はした」男であった、という指摘は、大杉の人となりを見事に言いあててゐるといえるであらう。

作家江口渙などは、「迷わされた男」の典型であるかもしれない。かれは、「私の短くない生涯のうちで、一ばん多くの人間的影響をあてたものに作家では夏目漱石があり、社会運動家では大杉栄がある」と一九三五年に書き、それから二〇年経った一九五五年の現在でも、この言葉を「少しも訂正する必要をみとめない。その上さらに「私がいままでこの眼で見てきた日本の革命家の中で、大杉こそがもつとも革命家らしい革命家であり、真実の意味での革命家

であった」という言葉をつけ加える必要さえ感じる」（「大杉栄・有島武郎・賀川豊彦」『中央公論』一九五五年一月）という惚れ込み方である。

もともと、「大杉こそ革命家のなかの革命家」という感慨は、江口だけのものではないらしい。昨年（一九五九年）秋に、往年の社会運動の闘士たちが一堂に会するという、珍しい催しもたれたことがある。その席には、一九二一年、労働者としてはじめてロシア入りし、スターリンとも握手したという経歴をもつ吉田一、大杉と協同して第二次「労働運動」を刊行した近藤栄蔵、あるいは神近市子、江口渙といったひとたちも顔をだしていたが、そこでもおなじ感慨が、列席者のほとんどの口からもさらされた、というように聞いている。

しかし、ぼくは、この感慨にたいしてちよつとしたらじらしさを感じる。いったい、江口や、これら退役ないしは予備役クラスの社会運動経験者たちの抱く、「革命家」のイメージとはなにか、まず、この点が気にかかる。

たとえば、まえにあげた江口渙の小論をみると、大杉が「革命家のなかの革命家」であることの根拠に、「人物のスケールの大きさと一刻も休むことをしらない闘争心の限りなきはげしき、さらに波瀾曲折にとんだ生涯や活躍した舞台の国際的なひろがり」があげられており、つづいて、「思想家としての大杉栄」の紹介という段取りになっている。

これから判断するなら、江口のいづく「革命家」のイメージは、もっぱら行動面、実践面でのなばなしい活躍に焦点が向けられ、

行動あるいは実践をつらぬいている思想からきりはなされた地点に位置づけられているようだ。そして、これは江口一人にかぎったことではなく、大杉に最大級の讃辞を呈するひとたちの多くもまた、おなじようなイメージの持主であることに注目したい。

なるほど、はなばなしい、ドラマチックな生涯や、めまぐるしいほどにエネルギーな行動力、傲岸なほどの自負と妥協すること拒む意志、こういったものは、「革命家」のイメージになくはならない小道具であるかもしれない。徳田球一と野坂参三、宮本顕治とならべてみて、だれがいちばん「革命家」らしいといえ、たいていは、お悩はちよつと弱くても徳球だね、ということになるだろう。

しかし、これらの「構え」あるいは「ポーズ」が「革命家」の査定規準となるなら、性格は陰性だが、北一輝も立派に合格するだろうし、西郷隆盛だって仲間入りできるかもしれない。こういった有象無象の第一人者に大杉栄を仕立ててみて、さてそれがなにになる、ぼくがさつき、江口をはじめとする老兵たちの感慨にしらじらしさを感じる、といったのは、じつはこのためなのだ。

惚れた眼にはあばたもえくぼというけれど、大杉もとんだひとたちに惚れたものでもある。マルクス主義に転向し、あるいは国家社会主義に転落し、さては善良な小市民になりすました、そういう連中が口を揃えて「大杉はえらかった、革命家のなかの革命家だった」なぞと酒の肴にする図は、まさしく現代のスキヤンダルである。

こういう風景をみると、平野謙が、「日本のテロリスト」（『群像』一九五八年七月）で述べた見解に、不本意ながら、部分的に同

意せざるをえなくなってしまう。平野は、そこで、日本の革命運動が、私小説家とおなじく、大衆から隔離された「いわば部落共同体のような特殊地帯のなかでだけ、うごまわることを許されていたに過ぎない」ときめつけ、それは「戯画ではないか」とさえ言っている。

誤りの多いことで定評のある江口渙の『続・わが文学半生記』を、「ほとんど唯一最高のもの」と手放しで賞讃し、それをネタにして「日本の革命運動の一性格を抽出」しようという平野自身にも、「いわば部落共同体のような特殊地帯」産の発想が認められないではないが、それについては、いまは言うまい。

ここでは、ただ、大杉のような「革命家のなかの革命家」と直接交わったひとびとの多くが（けつしてすべてではないが）、大杉の生涯のうわつらだけをあげつらい、かれの内面で煮えたぎっていた思想に無頓着でいられる、その秘密を解く鍵として、平野の仮説は役立ちそうだと、ただけ言っておきたい。

つまり、一般大衆から隔離されて、「特殊地帯」に追いこまれた革命運動は、思想を練りあげてゆく基盤をうばわれ、主観的な気分支配されやすくなる。大正末期から昭和へかけて、先づそりしてゆくアナキズム運動はその一つの典型であるが、大杉のうちに「革命気分」だけ見て、「革命思想」の発見を怠る病根は、まさしくここにありといえよう。

といっても、もちろん、ぼくは、大杉が「革命家」であることを否定するのではない。ただ、通俗的な「革命家」のイメージの枠に大杉をはめこみ、この枠からはみでる部分は切って捨てるといふ、

大杉栄の俗流化に我慢がならないだけである。

しかし、この俗流化がなんと多いことだろう。ぼくは、いま一つの俗流大杉論の実例として、河上徹太郎の大杉論（『日本のアウトサイダー——大杉栄の章——』『中央公論』一九五五年三月）をあげておこう。

河上徹太郎もまた、江口渙とおなじように、「思想家」と「実家」を、きりはなされた二つのタイプとして取上げ、両者のからみあいといういちばん大事な側面から眼をそらしている。かれによれば、大杉は、「実行力と人柄の魅力を持った実家であり」、「時流を抜きん出る論理の犀利さはあるのだが、思想家として一家をなす独創は認められないのである」ということになる。

河上のいうところの「思想」とは、たいへん高級な、開けてびつくり玉手箱のようなものらしく、たとえば、「思想の科学」グループの理解する「思想」とは、およそ対照的な地点に位置しているように見受けられる。「思想家として一家をなさないものの思想は、余り重要でない」という優等生然とした、いやらしい考え方は、明らかに事大主義であり、戦前の日本の思想界を牛耳った思想官僚に特有の発想である。

事大主義といえば、河上は、社会運動の方での「大杉の思想はクロボトキンの『相互扶助論』であり」、「人間的な面での思想の中核は、案外マックス・シュティルネルの『唯一者とその所有』のようなどころにあるのではないだろうか？」というようなことをいつている。「運動の方」と「人間的な面」という形式的な分け方が、そもそもおかしいが、この二つの面の思想を、それぞれクロボトキ

ンとシュティルナーによって代表させるところにも、河上の事大主義がうかがわれよう。

一九二二年、総連合決裂のさいの「大杉の思想はクロボトキンの『相互扶助論』であり」「これが彼の思想の頂点と見ることが出来るよう」、こう河上は述べている。なにを手掛りにして、こういうのはずれの判断をみちびきだしたのか、見当もつかないが、誤りであることだけは、たしかである。「相互扶助論」の思想が、大杉の思想で重要な役割を演じていることだけはまちがいない。しかし、大杉には、クロボトキン主義を乗り越えてゆこうとする姿勢が、いたるところに見出されるし、じじつ数歩前進して、西欧のアナキズムおよびサンジカリズムの観念では律しきれない、オリジナルな思想をうみだすところまでいっている。なぜこの点が見逃されたのか。

まずかんがえられるのは、社会運動を支え、すすめてきた諸思想にたいする、河上の恥しいほどの不感症である。河上自身、「社会運動史に疎い」と自任して、いわば予防線を張っているのだが、河上は、テロリズム、アナキズム、サンジカリズムの初歩的な相違さえ、弁えていないらしい。それは、文中で一度ならず、大杉を、「テロリスト」とみなしていることから推察できよう。これでは、大杉が、既成社会主義のあつい壁にをはしを打ちこみ、ともかくも突破口を一つ開けた業績など、目につかないもの当然である。河上が、大杉のうちに「社会運動家」、「実行家」のみを認め、大杉の社会行動をつらぬいている思想を思想としてつかまず、大杉の人物論でお茶をにごしたのは、けっきょくのところ、ダイナミックに展開される現実にからみつ、もちつもたれつしながら練られ

想は、この時（一九〇六年～七年〔筆者注〕）既に、幸徳君よりも完成せられてゐたやうに思ふ」（「大杉君と最後に会ふた時」『改造』一九二三年一月）という。

一九〇六～七年（明治三九～四〇年）といえ、大杉が電車焼打事件（一九〇六年三月）に加わって、三ヶ月市ヶ谷監獄にほうり込まれた年である。大杉が平民社に入りのようになったのは、一九〇三年末からであったが、名古屋幼年学校を男色行為がもとで二年半にして退校させられ、外国語学校仏語科に通学していたかれは、週刊『平民新聞』などの発送を手伝うかたわら、その語学力を買われて、フランスの新聞雑誌の翻訳記事で、『平民新聞』の後継紙である『直言』や『光』の海外事情欄に寄稿したりしていた。しかし、一方では外国語学校を卒業後、陸軍大学のフランス語教官となつて、幼年学校時代の僚友の鼻を明かしてやれ、というような茶目気もあり、旧師をつうじて就職運動をしており、一九〇六年三月以前の大杉の腹はまだしつかりきまっていなかった、とみてよい。

したがって、東京市内電車賃上げ反対第二回市民大会に端を発した、いわゆる「兇徒聚集事件」あるいは電車焼打事件は、大杉の生涯にとって、いわば決定的なものであった、といえよう。『獄中記』でみずから語っているように、それまで、いくぶんかあやふやだった二一歳のフランス語学生の前途は、この事件にぶつかって、ほとんど否応なく、社会運動、革命運動の側へ組み込まれてしまつたからである。

実存主義者にいわせれば、ひとの生涯は賭であり、自覚的に選ぶとるものだが、その場合でも、案外、偶然な事件が選択の踏

てゆく社会運動の思想にたいして、河上が、まったく不感症だからであらう。かびくさい書齋のなかの横文字の魔術にしか「思想」を感じない、倒錯した知性の持主が、一九六〇年の今日もなお、大手を振って論壇をまかりとるとは、まさにおどろきだ。

じつをいえば、このような倒錯した論理の横行によって、日本における革命の思想は人民のなかにふかく根を張ることを妨げられたのである。日本の革命家たちを「特殊地帯」に追いこむのに、この論理が一役どころか、かなり重要な役割を演じていることを忘れてはなるまい。そして、このことを見抜き、それとの闘いを提唱したのが、大杉であったことをつけくわえておこう。大杉は、つぎのように言っている。

「書物を読むよりも先づ、自らの身辺に生きてゐる事実を眼を転ぜよ。そして、其の事実に対して、徒らに頭の中で理窟をこね廻はさず、只だ其の有りのままを注視せよ。其の事実そのものに對しては飽くまでも深く、又其の事実と關聯する諸事實に對しては飽くまでも広く、出来るだけの觀察と調査とを遂げよ。又必要の場合には、此の必要は甚だ屢々起る事であるが、自ら其の事実の中に身を投じて見よ。即ち自ら自分を実験に供して見よ。斯くの如き觀察と実験との度び重なるに従つて、始めて僕等は、僕等自身の、動かすべからざる思想を築き上げて行くのだ。」（『個人的思索』第二次『近代思想』第四号・一九一六年一月）

二

山川均のいうところによれば、「アナキストとしての大杉君の思

板になつてゐるようである。このような偶然のいたずらがあるからこそ、ひとの一生にも、人間の歴史にもひだが刻まれ、厚みができるのであらう。もしひとの一生にしろ、人間の歴史にしろ、一目瞭然、始発駅から終着駅までの全行程を見通すことのできる図式によつて規定されてゐるのだとしたら、およそ人生とは退屈きわまりないものとなるだらう。こういう図式の信奉者に、退屈きわまりない人種が多いのはそのためだからかもしれない。

大杉には、「賭博本能論」（第一次『近代思想』第二卷一〇号・一九一四年七月）という評論もあり、計算づくでない、というより合理的な測定を本能的な衝動で突き破るような、一か八かの冒險に身を投ずる行為をたかく評価している。この評論は、実存主義的な匂いがつよく、大杉の思想や生涯にも、「賭はなされた！」といったドラマチックな状況を、しばしば見出しうるが、かれの最初の重要な選択は、電車焼打事件に加わつて、「主義者」の烙印をベッタリ額に貼られるという、おもいがけない状況の現出によつて、どうもなされたようだ。

こうして、腹をきめて保釈で出獄してきた大杉を迎えるかのように、サンフランシスコから、直接行動論を土産にして、幸徳秋水が帰ってきた。

大杉が、はじめて社会主義思想に接したのは、幸徳の『社会主義神髓』をつうじてだといわれるが、その後も幸徳の直系として、かれからもつともつよい影響を受けていたらしい。幸徳もまた大杉に目をかけ、アメリカから、獄中の大杉に『パクーニン全集』を送つてやつたりしている。

この『バクーニン全集』は、おそらくフランス語版ではないかと思われる。というのは、英語版のバクーニン全集は、まだ刊行されたことがないし、ドイツ語を大杉はまだ知らない時分のことだからである。もしこの仮定がたゞしく、獄中ですでにバクーニンが読まれていたとすれば、かれが幸徳以上にふかくアナキズムを理解する下地は、このとき培われていた、といえよう。のちになつて書かれたつぎの言葉は、そのことの証言として役立つかもしれない。

「無政府主義を知りはじめた青年の誰れでもが、必ず先づ罹るバクーニン熱に、僕もやはり二十年近い昔に罹つた。今はボルシェキズムで時めいてゐる山川君なども、当時はやはり自ら「麦人」とまで名のつてゐた。」（『二人の革命家』自序）

もっとも、『山川均自伝』によれば、「麦」というペンネームを、山川が使つていたことは事実だが、この「麦」は「バクーニン」の「バク」ではなく、聖書の「一粒の麦もし地に落ちて死なずば」の「麦」であつた、とされている。

それはとにかく、この自序に一九二二年六月一日の日付のあるところから逆算して、大杉の罹つていたバクーニン熱の時期は、一九〇六・七年にきわめて近いところと推定できる。

「革命家のなかの革命家」にまさしくふさわしいバクーニンに、当時、大杉が熱を上げていたとすれば、幸徳のアメリカ土産である直接行動論の提唱に共鳴するのは、しごく容易なことであつたらう。そして、山川が言うように、先輩幸徳を凌いで、直接行動論の理論的支柱であるアナキズムをふかく理解していつたとしても、さして不思議はないかもしれない。幸徳のアナキズムの知識は、おもに英

語をつうじて仕込まれたものであり（幸徳はフランス語はできなかつた）、英語によるアナキズム文献は、クロボトキンのをのぞけば、目ぼしいものは少なく、アナキズム、サンジカリズム運動も、英語国民の間では活発とはいえない。なんといつても、アナキズム、サンジカリズムの本場は、フランス、イタリア、スペインなどラテン系諸国であり、とくに二〇世紀初頭、サンジカリズム全盛期の運動の中心は、フランスであつた。

大杉が、「光」に訳載し、新聞紙条例違反で四ヶ月の輕禁錮をくつた「新兵諸君に与ふ」は、フランスのアナキズム週刊紙「ラナルシー」に掲載されたアッピールの翻訳だが、これによつても、かれがこれらフランスのアナキズム系新聞、雑誌に目を通していたことがわかる。ぼくのお好みの論法を使えば、大杉が外国語学校でフランス語を専攻したという偶然は、かれを日本の代表的な、いわば本場仕込みのアナキズム理論家に仕上げるのに、かなりの役割をはたしているともいえる。

一九〇七年二月五日、日本社会党第二回大会をまゐにして、幸徳は日刊『平民新聞』に「余が思想の変化」を掲載し、「余は正直に告白する。『彼の普通選挙や議會政策では真個の社会的革命を成遂げることは到底出来ぬ。社会主義の目的を達するには、一に団結せる労働者の直接行動（チレクト・アクション）に依るの外はない』……」と宣言した。

この宣言は、前年六月幸徳が神田錦輝館で行つた爆弾演説のいわば再確認のだが、大杉はこの論文を補足するかのようにな、「欧州社会党運動の大勢」を、二月六日から十二日にかけて日刊『平民新

聞』に連載し、幸徳の直接行動論こそ、世界の社会主義運動の大勢であることを明らかにしようとしている。

すなわち、かれはこの論文のなかで、「近時、欧州に於ける社会党運動の最も重大なる問題は、即ちこの非軍備主義と労働組合主義との二つなる事を断ずるを得る也」と述べ、それがヨーロッパだけでなく、世界的な動きであることを、その前年に開催されたドイツ、フランス、イタリアの社会党大会の模様などをつうじて指摘し、はじめて直接行動派としての自分の立場を公けにしている。

「更に予は之を我が日本に見るに、嘗ては議會政策を以て唯一の革命運動なりとなし、何人も之に対して些の疑問を挟まざりしが、遂に幸徳氏出でて議會政策の愚と陋とを絶叫するに至れり。予も亦予の革命的社會主義の立場より、議會政策は寧ろ社會革命の氣勢を弱むるものなりとし、而して、労働者の直接行動によらざれば、到底社會革命を全うし得可からずと信ずるに至れり。」

ここで、大杉が、直接行動論のたゞしさを、おもにヨーロッパ、アメリカの社会主義運動のあたらしい動きによつて説明しようとしている点に注目したい。ここには、すでに、抽象的な現論体系からでなく、そのときどきの具体的な事象の把握に思索の出発点をおく、かれの直観的な発想が見出される。かれにはそのときどきのなかから、あたらしい時の流れを嗅ぎつける、人並みすぐれた嗅覚のよくなものがあり、かれの本領はこの嗅覚をフルに生かして、底流として流れている現状変革のエネルギーを探りあて、これを噴き出せることであつた、といえる。（それがかれの弱味ともなつたことは、前に述べておいた。）

幸徳を筆頭とする一九〇七・一〇年の直接行動派については、多くの社会運動史家が、片山潜、田添鉄二ら議會政策派に比して、否定的もしくは批判的評価をくだしている。これについては、べつつの機会にくわしく論じたいとおもうが、一九〇七年にはじまる戦後反動恐慌を背景として、労働者のストライキの件数が明治年間最高の百数十件（一九〇五年は一九件）に達したその年の社会情勢を考慮するとき、幸徳らの直接行動——ゼネラル・ストライキ論が、たとえば、荒畑寒村（当時直接行動派の雄であつた）がいうような「実践を離れた観念論」（『回想——日本社会主義運動史』『論争』第4号・一九六〇年三月）にすぎなかつた、とは言い切れまい。幸徳ら直接行動派の主張が、どれほど当時の労働者に影響を及ぼし、あるいは逆に影響され、ストライキをはじめとする争議に労働者立ち上がせたかはなお検討しなくてはならないが、議會政策派のいう「普選請願署名」よりはるかに強力に労働者のエネルギーを引き出したことはほぼまちがいない。人海請願がどれほど労働者の変革へのエネルギーを浪費させ、抹殺したことか、比較検討してみるのが面白かろう。ついでながら、一九〇七年から九年にかけて、兵士の集団脱営が目立つてふえていることもあけておこう。これは一九〇七年に陸軍が二年兵制となつたことも関連するかもしれないが、大杉がとくに力を入れていた非軍備主義の思想宣伝と全く無関係だとも断ぜられないようである。大杉が「新兵諸君に与ふ」を訳載して、禁錮四ヶ月の刑をうけたことはすでに述べたが、かれは、一九〇五年ごろ

からフランスにおけるエルベの非軍備主義運動の紹介を中心に論陣を張っていた。

よく知られているように、日本の社会主義運動は、平民社の非戦論をつうじて大きく発展している。つまり、非戦論、今日の言葉で言えば反戦主義は、平民社以来の伝統ともいべき主張だが、その内容は、週刊『平民新聞』時代のそれと、大杉らのそれとはかなりちがってきている。幸徳、堺、西川、石川ら平民社のひとたちが日露戦争に反対して唱えた非戦論は、おもに人道主義的な、キリスト教的な平和主義の色彩が濃いのが、大杉らは、この非軍備主義運動を革命運動の重要な一翼として受けとめている。

たとえば、一九〇八年『日本平民新聞』にのせたかれの論文「非軍備主義運動」をみると、かれはつぎのように、この運動のおこった理由を説明している。すなわち、「初期の社会主義者或は、無政府主義者」は、革命の手段としてバリケードによる市街戦をかんがえていた。ところが、都市の街路はひろくなり、政府の軍隊、兵器も完備されてきたので、このような戦術で政府と対抗することはできなくなった。しかもこの軍隊が、しばしば労資の紛争に介入し、ことの是非も問わず、つねに資本家なる掠奪者を助け、労働者を弾圧する道具となつていく。しかし、軍隊を構成している兵士は、労働者とおなじ階級の出身である。かれらに働きかけ、軍務を拒否させることができれば、政府を倒すこともまた可能になる。非軍備主義は、このように革命運動の必要から生まれたものだ、と。

これが大杉の論旨の要点である。もちろん、これはフランスの非軍備主義運動の大立物エルベらの主張の受売りに近いものであるう

が、受売りにせよ、このような反戦主義の理解の仕方は、週刊『平民新聞』時代のそれに比べて、はるかに進んでいるといえるだろう。ひよつとすれば、社会革命をタブーにしている戦後の幅広式平和論よりも、先進的ですからあるかもしれない。

また、いま一つの「欧州における社会党運動の最も重大なる問題」である「労働組合主義」、すなわちサンジカリズムについても、かれは、まえにあげた「欧州社会党運動の大勢」のなかで、労働組合には二通りの種類のあること、一方は「センデカ」と称する、革命的な、反政治的な組合運動で、ゼネラル・ストライキを決定的な武器とする。他方は「トレードユニオン」と称する、改良的、労使協調的な組合運動で、政治的中立を標榜し、「一定の主義方針を抱かず、只資本家と互譲して砂糖水の甘さに酔ひ、貯金箱を重くして老後及び災難に際する不安の念を除去するを以て、殆ど唯一の理想とする者也」と述べている。大杉がこのころすでに、サンジカリズムの特質をただしくつかんでいたことは、この文章からもうかがいうるであろう。幸徳も、このことを認め、一九〇七年二月三日付吉川守園宛の手紙のなかで、「……『ゼネラルストライキ』の原稿は地方の人に貸してある。返して来次第君に見せる。併し書物は無くとも、今は大杉と山川などが余程よく研究して居るから、聞けば分るだろう。」（塩田庄兵衛編『幸徳秋水の日記と書簡』二五九ページ）と書いている。

このように、社会運動に本腰をいれてからの大杉の思想的成長はめざましかったが、それとともに官憲の圧迫もはげしさを加え、一九〇七年五月に巣鴨監獄入りして以来、一九一〇年一月千葉監獄

からでてくるまで、新聞紙条例違反、官吏抗拒、治安警察法違反などの罪名で通算三年四月半におよぶ獄中生活をよぎなくされた。ここで大杉が、アナキストとしての自分をつらぬくために、どのような試練に耐え、どのような犠牲を払わなければならなかったかを物語る記録の一つとして、千葉監獄から妻堀保子にあてたかれの手紙の一節を引用しておこう。日付は一九〇九年八月七日になっている。

「八月と云へば例の月だ。足下と僕とが始めて靈肉の交りを遂げた思出多い月だ。足下の謂はゆる『冷静なる』僕と雖も亦感慨深からざるを得ない。数ふれば早や三年、しかも其の最初の夏は巢鴨、二度目の夏は市ヶ谷、そして三度目の夏はここ千葉と云ふやうに、いつも離ればなれになつてゐて、まだ一度も此の月の其の日を相抱いて祝つた事がない。胸にあふれる感慨を語り合つた事すらない。

そして此の悲惨な生活は、直ちに足下の容貌に現はれて、年のほか顔色あせてしわみ行くのを見る。しかし、これが果して僕等にとつてなげく可き不幸事であらうか、僕に愛誦の詩がある。ポオランドの詩人クラシンスキイの作、題して婦人に寄すと云ふ。」（アルス版『大杉栄全集』第四巻四四四～四五ページ）

手紙のなかでふれられているクラシンスキイの詩は、女性の美は顔形や処女性のうちにあるのではなく、「世の有らゆる悲哀を嘗めて」、「悲哀の生涯の、／力の冠が織り出された時」、その時にこそ、「ああ君は美だ、理想だ！」とうたう、ロマンチックな色彩を帯びた作品だが、「日に十一、二時間づつ額にあぶらして下駄の鼻の心造つて、そして月に七、八錢づつの賞与金と云ふのを貰う」

獄中生活のなかで、このような詩を愛誦しながら、なにくそと頑張つていた大杉の青春のきびしさ、たくましさは、心にとめておいてよいことだとおもう。当時、大杉は二四歳、いまの全学連の闘士たちにちよつと毛が生えたぐらいの若さである。

赤旗をふつて、無届デモ（届けてもむろん許可にはならないのだが）で警官隊ともみ合う、たつたそれだけのことで二年六カ月の懲役という極刑を受けたり、新婚の病妻と切りはなされ、父の死目にも会えぬという、世間的にさんざんな目に会わされたのだが、しかし、大杉自身、「僕は監獄で出来上つた人間だ」と自負しているように、この獄中生活は大杉の人間形成に決定的といつてよい役割を果たしている。

さらにまた、「大杉社会学」の確立をめざして、獄中で独修された哲学、社会学、経済学、文学等々、ひろい範囲にわたる知識の蓄積や、ドイツ、イタリア、ロシアなど数カ国語の学習が、かれの思想のその後の展開にどれほど役立ったかは、ちよつと測定が困難なほど大きい。かれが一犯一語（一度入獄するたび一つ外国語をものにする）の原則を立てたことは有名な話で、「敢てエンゲルスを気取るわけでもないが、年三十に至るまでには必ず十ヶ国の言葉を覚えて見たい」（前掲書四二八～二九ページ）と、千葉監獄から気焰をあげている。念願成就したか、どうかはあやしいが、エスペラントとイタリア語だけは、だいたいマスターしたらしい。

それともう一つ、獄中にいたために、危く生命が助かつたという大きな拾いものがある。というのは、一九一〇年の俗称「大逆事件」に、辛うじてまき込まれずにすんだからである。「大逆事件」が、

直接行動派の根絶やしをねらって仕組まれたことは、今日ではもはや定説になっており、大杉も危うく引き込まれようとしたらしい。しかし、いくらでたらめでもそこまで網をひろげられなかったのかどうか、その辺の事情は不明だが、検事の取調べがあつただけですんでいる。だが、もし獄外にいたら、もちろん有無をいわずに引つくられていたことであろう。

大杉が千葉監獄を出獄した二ヵ月後、一九一一年一月、幸徳秋水ら二人が市ヶ谷監獄の絞首台上に上つた。やっと生きのびた大杉は、その後まもなく、「春三月縊り残され花に舞ふ」とうたつてゐる。

三

大逆事件以後、日本の社会運動は、一時、まったく窒息状態におちいり、支配階級の弾圧は功を奏したかにみえたが、しかし、それまたかだか二年に満たない短期間のことであつた。なぜなら、一九一二年一〇月、大杉は荒畑とともに、雑誌『近代思想』を創刊、社会主義者の健在であることを世に示したからである。

思想、文芸雑誌という形で旗揚げしようという考えは、すでに獄中にある時から抱いていたらしい。出獄の年の一九一〇年一月二十五日付で、堀保子にあてた手紙は、そのことを示している。「僕は、前に云つた雑誌が出せるなら、先づこの編輯をやりたい。雑誌は『研究』（『社会主義研究』を指す）くらいの大きさで、科学と文芸とを兼ねた高等雑誌にしたい。世の中は大真面目になつて来た。真の知識、真の趣味の要求が、甚だ盛んになつてゐる。僕等が、実

際の思想よりも数歩引き下げれば、丁度この要求に最もよく応ずるものになる。文学も多少僕等の時代に近づいて来た。僕等の思想なり僕等の筆致なりにシツクリ合うアナトル・フランスなどいふ連中が、大分もてはやされて来た。若し雑誌が出せぬとしても、僕は此の方面において、大いに僕の語学力を発揮して、『革命家』としての以外に旗上げをする積りだ。」（□内は推定）（前掲書四六七～六八ページ）

このような考えにヒントを与えたのは、一八九一年春、フランスで発行された週刊の小雑誌「『Endeavour』（大杉はこれを『門外漢』と訳している、今日流にいえば『アウトサイダー』といったところか）であつたように思われる。この雑誌は、ヴェルハレンやミルボー、レニエら当時の新人が中心になつていたが、そのなかにはジャン・グラウヴやシャルル・マラートのような一九世紀末のフランスのアナキズム運動を背負つて立つた闘士たちも参加していた。大杉は、『座談』（第一次『近代思想』第一巻第三号・一九一二年一月）のなかで、「当時の仏蘭西は今の日本と同じくレアクションの時代で、其間には随分共通の事実が多いやうだ。僕は今日の日本にも一ツ位は斯んな雑誌を欲しいものだと思ふ」と述べているが、『近代思想』こそ、まさしく「斯んな雑誌」であつた。

『近代思想』は、苛酷な政府の弾圧を避けるために、不本意ながら取つたカモフラージュであつたかもしれないが、しかし、この時点で、思想、文芸の分野に運動の再出発点を求めたことは、きわめて適切であつたといえよう。なぜなら、文芸の分野では自然主義が漸く衰え、『三田文学』による永井荷風、北原白秋、谷崎潤一郎、

佐藤春夫らのいわゆる新ロマン主義や、『白樺』による武者小路実篤、志賀直哉、有島武郎、里見淳らのいわゆる理想主義の運動が新風を吹き込み、思想界においても、オイケン的人格主義、トルストイの人道主義、ニーチェ、ベルグソンの生の哲学、リッブスら新カント派理想主義等々の新思潮が、インテリゲンチヤの心をとらえはじめ、また平塚雷鳥らによるいわゆる新しい女の機関誌『青鞥』が出るなど、転換の機運がようやくかもし出されていたからである。

明治ナショナリズムから大正デモクラシーへの移行の思想的基準作業が、すでに開始されていたのである。

すでに述べたように、大杉は時代感覚というか、時流の動向に対する嗅覚というか、ともかく今日の現実のなから明日を掘りだす人並すぐれたセンスの持主であつた。『近代思想』を発行するまえに、すでに、思想、文芸界でのこれらの新しい動きを計算し、見通しを立てていたかどうか、その点は疑問である。大杉は勘はすこぶる鋭敏だが、先の読みはそれほど深くない。どちらかといえば、「出たとこ勝負」でゆこうとするタイプである。しかし、『近代思想』が、当時の新思潮をすくく反映し、その最左翼を形成しえたことは、大杉の時代感覚の所産として評価すべきではあるまいか。

『近代思想』は、ふつう、大正期の社会運動の復活を告げるラッパとして、社会思想史あるいは社会運動史の観点からのみ評価されている。それはたしかにそうにちがいないのだが、『近代思想』がもつ意味は、けつしてそれだけにとどまらない。ぼくはすくなくともつぎの二つの点を、それにつけ加えたい。

一つは、日本の社会主義ないしは社会運動の主体化という視点で

あり、いま一つはその裏返しとして、日本の思想界、文芸界の社会化という観点である。

社会主義ないしは社会運動の主体化という言い方は、社会主義が、近代、すなわち資本主義社会とそのイデオロギーであるブルジョア民主主義を超えた地点に位置している建前からすればすこぶる奇妙であるかもしれない。けれども、それはいわば西ヨーロッパ社会をひな型としてつくりあげられた一つの図式であり、西ヨーロッパとは異なる歴史と文化をもつ日本で、そつくりそのまま通用するような代物ではない。

よくいわれることだが、マルクス主義はフランス社会主義、イギリス国民経済学、ドイツ観念論の三つを源泉としていわれている（ついでながら、マルクス主義者、とりわけ日本のマルクス主義者は、この三つのうち、ドイツ観念論にもっともくわしく、イギリス国民経済学には一通り目を通し、フランス社会主義をほとんど知らないのが通例となつている）。図式的にいえば、これら三つの源泉が、マルクスというパソナリティーを媒介として、いわゆる「科学的社會主義」が形作られてゆくわけである。

アナキズムについても、おなじである。ぼくは、近代アナキズムの三つの源泉として、一八世紀啓蒙主義もしくは自由主義、近代科学、フランス革命があげられるとおもうのだが、アナキズムにせよ、マルクス主義にせよ、それ自身、突如として歴史の舞台にあらわれたのではなく、長期間の、西ヨーロッパの歴史と文化の蓄積された重さを背負つて登場してきている。

したがって、その成果である種子をはるばる日本へ運んできて、

移植を試みても、地質を異にするゆえに、あちらさま同様に花を咲かすわけにはまいらない。といつて、歴史のフィルムを逆回転させることも、文化の地質を根底から取りかえることも、できない相談だ。社会主義が日本の土壌に根づき、日本革命の原動力となり、推進力となるためには、たんに西ヨーロッパの社会主義思想を学び、受け継いでゆくだけでは不十分な理由はここにある。そのためには、社会主義思想を受け入れる主体それ自身へと自ら戻らなくてはならなかった。つまり、諸外国の既成の社会主義運動の権威に追随するのではなく、日本の社会主義自体が、社会について、政治について人間について、自らの目と頭で観察し、判断する包括的な理論を創りあげていかなくてはならなかったのである。

日本の社会主義は、明治二〇年代から移植されはじめ、四〇年代の大逆事件をピークとして、一時、急カーブで衰えるが、明治の社会主義の主要な課題は、直接行動か、議会政策かの論争にうかがわれるように、戦術論が中心になっている。これは、日本のブルジョアジーが資本主義国家体制を確立してゆく過程で、西ヨーロッパから学んでいった形式主義的な政治主義的な態度に共通している。たとえば、明治の社会主義を代表する一人幸徳秋水は、よく知られているように、中江兆民流の唯物論者だが、かれの唯物論と直接行動論のむすびつきは、あまり明瞭でない。さらに、かれの日常や生活態度には、近代的な市民とはほど遠い古さがこびりついている。これらの古き――反近代的な、教育勸語的なバースナリティは、社会主義の、まさしく粉砕しなくてはならないものであるが、当面の闘争に追い廻わされていた明治の社会主義は、その点で、かなりの欠

陥を陣営内部に持っていた、といえよう。もつとも、この、ある意味では致命的ともいえる欠陥が、一九五〇年代の日本共産党の内部抗争にも露骨にあらわれていることを考えるなら、明治の社会主義をとにかく言うことはできないかもしれない。

大杉が千葉監獄の獄中で、翻然として悟るところあり、「嘗て食するやうにして掻き集めた主義の知識を殆ど全く投げ棄てて、自分の頭の最初からの改造を企てた」（『獄中記』七七ページ）のは、まさに明治の社会主義のこの致命的な欠陥を鋭く見抜いたからであつたらう。そこで彼は、「大杉社会学」の確立という途方もない野心に駆り立てられたのである。そして、「近代思想」は、この自己改造の延長線上に位置づけられなくてはならない、とぼくは考える。ここでは、それについての詳しい論証は省略するが、関心のある読者は、ぼくの『大杉栄研究』（一九七一年 法政大学出版局）を参照してほしい。

この点からいっても、大杉らが『近代思想』の仕事を通じて提起した問題の持つ意味は、大きいといえよう。果して、じつに大杉が自覚してこの問題を提起したかどうかには、疑問がのこる。あるいは怪我の功名であつたかもしれない。かりにそうだとすると、『近代思想』が果そうとした役割の評価は、ただしくなされなくてはならない。

『近代思想』に見出すことのできるいま一つの意味、すなわち、日本の思想界、文芸界の社会化については、大杉自身、つぎのように述べている。すなわち、『近代思想』は、「中等社会の知識者に向つて其の社会的反省と自覚とを促し、又僕等に対する其の理解を求

めた」と記し、ついで「僕等の此の目的は可なり程度に達せられた。殆ど個人的興味にのみ溺れていた文壇の形勢は多少の社会的興味に傾いてきた。素よりこれは僕等及び他の文壇の進歩的思想家諸君の力ばかりではない。其の可能的要素が、既に思想界の中に含まれてい、且つ種々たる社会的出来事の影響があつた事は争われない。そして僕らはただそれを促進さす一役目をつとめたに過ぎない」（『大久保より』第一次『近代思想』第二巻第九号・一九一四年六月）と、指摘している。

つまり、『近代思想』が、当時の新思潮である個人主義、生の哲学、プラグマティズム、人道主義等々を、のちにマルクス主義者がやったように、「ブルジョア的」のレッテルによつて、ひとまとめにして排斥せず、積極的にそのなかから先進的な、革命的なエネルギーを吸い上げようというしなやかな姿勢をとることによつて、今日流に言えば、新進の文学者、評論家と社会主義者との間に共通の広場がつくられていったのである。

このような広場の形式は、さきに述べた、日本の社会主義に課せられた任務、すなわち、諸外国の既成の社会主義思想の摂取と、それに併行し、やがてはそれを凌駕すべき日本独自の社会主義思想の創造という課題に沿うものであつたが、一方、日本の文学や思想の側からみても、それが象牙の塔や文壇という名の職人ギルド内に閉じこめられ、畸型児化することをまぬがれるためには、どうしても必要な条件であつた。上層ブルジョアジーが天皇を頂点とする大地主層と早くから結合し、強力な官僚制支配機構を確立した日本資本主義のもとで、西ヨーロッパなみの（といつても、典型となるイギ

リス、フランスあたりはともかくとして、たとえば、スペインなどはこの物指しでは計りにくいのだが）、市民文学あるいはブルジョア文学の開花を期待することは、とうてい不可能である。吉野作造らを旗手とする大正デモクラシーが、最初から民主主義でなく、民本主義というゆがんだ型で提起されなければならなかった理由も、一つはここにあり、大杉が評論「民主主義の寂滅」（『文明批評』第二号・一九一八年二月）で、吉野の有名な論文「民主主義の意義を説いて再び憲政有終の美を済すの途を論ず」を徹底的に批判して、「そんな科学的政治学や科学的政治学者は、人間として目覚めかけた僕等の要求には一文の値打もない」ときめつけたのも、日本においては民主主義は、社会主義革命のなかではじめてたたく実現されることを、かれの鋭敏な嗅覚がききつけていたからであらう。

この共通の広場には、土岐善磨、上司小剣、馬場孤蝶、三木露風、若山牧水、小山内薫、内田魯庵、生田長江、岩野泡鳴、相馬御風、安成貞雄、二郎兄弟等々の顔ぶれが見える。石川啄木なども、早死しなかつたら、ここに顔を出していたかもしれない。啄木の詩「果しなき論議の後」「墓碑銘」は、遺作として第一次『近代思想』第一巻第一〇号（一九一三年七月）に掲載されている。

このような豊かな未来を抱いていた『近代思想』は、ちょうど二カ年、二三号を刊行して廃刊になってしまふ。大杉の記すところによれば、「ブルジョア青年を相手にして、わけのわからぬ抽象論をするかわりに、僕等の真の友人たる労働者を相手にして、端的な具体論に進みたい」（『智識的手淫』第一次『近代思想』第二巻第八号・一九一四年五月）というのである。

こうして『近代思想』は廃刊になり、共通の広場の拠点は失われてしまいが、『近代思想』に見出される三つの旗じるし、すなわち社会主義の進軍ラッパ、社会主義の主体化、思想、文芸の社会化は、その後も大杉のうちに受けつがれ、この三つを軸にして、かれは独創的な思想と運動を打ち出してゆくのである。

四

ところで、このような視点に立つなら、大杉流「生の哲学」を、ただちに「観念論的」ときめつけるわけにゆくまい。大杉が愛用したのは、本能とか生命、自我、精神というような非合理的な概念で、体系化された理論や、主知的な、合理的な思考にはたかい評価をあたえていない。

たとえば、「僕は精神が好きだ」（『文明批評』第二号・一九一八年二月）という感想のなかで、大杉は、「僕は精神が好きだ。しかしその精神が理論化されると大がいは厭になる。理論化と云ふ行程の間に、多くは社会的現実との調和、事大的妥協があるからだ。まやかしがあるからだ。／精神其儘の行為は猶更稀れだ」と書いている。

ここに書かれている「精神」を「生命」もしくは「本能」と書きなせば、大杉のいおうとする意味は、いっそうはっきりするだろう。かれは、この「生命」をそれ自体「拡充」し、「充実」してゆく「力」としてとらえている。「力」は「動作」として現象するが、この「生命」にはひろい意味とせまい意味がある。せまい意味の「

生命」は「自我」だと、かれは定義している。

こうした考え方を、ベルグソンの「創造的進化」の思想や、シュティルナーの「唯一者」の思想に結びつけて、河上徹太郎のように、「生」自我を第一次的なものとするゆえに、「観念論的」（『日本近代社会思想史』一六九ページ）とすることは、容易であるかもしれない。

しかし、一方で大杉は、「征服の事実」という現実を、『共産党宣言』の公式などによりながら強調し、「この征服の事実、過去と現在と及び近き将来との数万或は数千年間の、人類社会の根本事実である。この征服のことが明瞭に意識されない間は、社会の出来事の何ものも、正当に理解することは許されない」（『征服の事実』第一次『近代思想』第一巻第九号・一九一三年六月）と述べている。

かれによれば、「今や近代社会の征服の事実、殆どその絶頂に達した。征服階級それ自身も、中間階級も、また被征服階級も、いづれもこの事実の重さに堪へられなくなつた」（『生の拡充』第一次『近代思想』第一巻第一〇号・一九一三年七月）そして、「生が生きてゆくためには、かの征服の事実に対する憎悪が生ぜねばならぬ。憎悪が更に叛逆を生ぜねばならぬ。新生活の要求が起きねばならぬ。」（同右）のである。

大杉におけるこの社会認識は、かれの「生の哲学」とともに、かれの思想の大黒柱をなしている。そして、この両者が切りむすぶところに、かれの思想の全体が形成されるわけである。したがって、片方の柱だけに注目して、それだけで評価しようとするのは、あき

らかに片手落ちであろう。むしろ、主体的な生命あるいは自我の觀念を社会主義的な認識に結合させるかれの独創的な構想にこそ、着目すべきではないだろうか。

この構想が、当時の日本の社会主義の要請に一致したものであることは、すでに述べたところから推量できるとおもふ。

「征服の事実」という社会認識が、おもに『共産党宣言』の公式に依存していることはすでに述べた。大杉自身、べつどころで、「僕は歴史を解釈する主要なる一導線として、所謂物質的史観を懐てゐる」（『現代社会観』一九一五年八月——『自由の先駆』四四ページ）と告白しており、かれの評論「創造的進化」（第一次『近代思想』第一巻第七号・一九一三年四月）では、自然科学、とくにダーウインやラマルクなどの生物学説といわゆる下部構造（そういう用語はもちろんないが）との関連を、唯物史観風にとらえている。このような歴史のとらえ方は、クロポトキンにはなく、やはりマルクス、エンゲルスから学び取ったものであろう。

このように、大杉は、一面、マルクス主義の観点を取り入れているが、他面、マルクス主義の陥りやすい客観主義的な偏向に対して、きびしい批判を忘れなかった。かれは、評論「生の創造」（第一次『近代思想』第二巻第四号・一九一四年一月）で、「社会主義はこの所謂物質的史観説に立脚して、社会進化の要素として経済的行程、工業技術的行程を過大視するの結果、彼の必然から自由への飛躍を、外的強迫から内的発意への創造を、単に到着点としてのみ強調して、等しくまたこれを出発点としなければならぬことを忘れて了つた」と書いている。当時、日本に紹介されていたような、客観主義的に

偏向したマルクス主義から「内的発意への創造」の「出発点」をみちぎきだすことはできない、と見て取つたかれは、それをシュティルナーの「自我」やベルグソンの「生」の思想のうちに求め、「征服の事実」という社会認識と「内的発意」という主体的な自覚との総合においてはじめて、人間解放の理論がたゞしく成立する、とかがえたのである。

この点で、大杉は、マルクスとベルグソンの折衷をくわだてた『暴力論』の著者ソレルのケースに似寄っている。大杉自身、ソレルを評価して、「……従来のマルクス派社会主義者の殆ど棄てて顧みなかった、主観の価値を力説した。人間其者の尊貴を高調した」（『ベルグソンとソレル』『早稲田文学』一九一六年一月）と述べている。

今日流にいえば、大杉もソレルもいわゆる主体性論者だつたわけである。もし大杉が今日に生きていて、主体性を強調するマルクス主義者と知合つたら、わが意を得たりと握手したであらう。一九一〇年、二〇年代にはそんなマルクス主義者は皆無にひとしかつたからである。しかし、同時に、「そこまで来たんなら、ついでのことマルクス主義のワクにこだわるのもやめようじゃないか、マルクスは自分でおれはマルクス主義者じゃないって言つてるぜ、ヒッヒッヒッ」と、得意の警句を吐いたかもしれない。

もっとも、大杉の主体性論は、すでにみてきたように、敗戦後、雑誌『近代文学』によって火をつけられた主体性論とは、かなりこととなつていく。戦後の主体性論は、主としてマルクス主義者、厳密にいえばスターリン主義者の客観主義的偏向へのインテリゲンチヤ